

三陸の海を放射能から守る

岩手の会

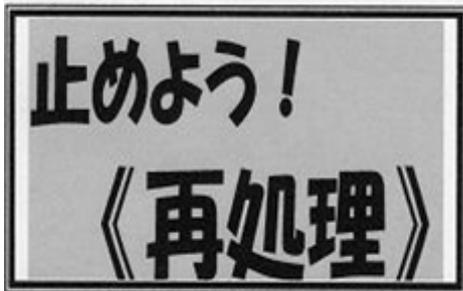
郵便振替 02240-5-102650

《再処理／岩手の環境》

http://homepage3.nifty.com/gatayann/env.htm

《まった再処理分庫》

http://briefcase.yahoo.co.jp/k_imag



《天恵の海》

2009 (平成21) 年

2月 12日

第66号

編集事務局 S.Oshida

TEL・FAX 019-623-1636

シンポジウム

「下北半島の原子力施設と活断層について考える」

2008年12月7日 青森市文化会館



司会 澤井正子さん (原子力資料情報室)
 報告 近藤正道さん (参議院議員)
 「再処理工場をめぐる国会の動き」
 渡辺満久さん (東洋大学教授・変動地形学)
 「六ヶ所再処理工場と大間原発周辺の活断層」
 石橋克彦さん (神戸大学名誉教授・地震学)
 「活断層と地震について」

各地に地震を伴う隆起変動地形

去る十二月七日(日)青森市において「下北半島の原子力施設と活断層について考える」をテーマに、シンポジウムが開催されました。報告者は、近藤正道参議院議員、変動地形学の渡辺満久教授、地震学の石橋克彦名誉教授

授でした。地震国でありながら、対策が不十分なまま施設建設が推し進められてしまった歴史を聞き空恐ろしさを感じました。「岩手の会」から二人が参加し取材などところもありませんが報告します。(尚)

国政の場で原子力政策 転換の議論を進める 近藤正道氏

一番目の報告者は新潟県選出参議院議員で、柏崎刈羽原発の「核震災」をいち早く目撃した近藤正道氏でした。次のような報告を行いました。国会では原子力安全について強い関心を持つ議員によって「原子力政策『転換』議員懇談会」が組織された。金田誠一衆議院議員を代表に党派を超えて三五人が名を連ねている。同会は九月には原子力安全・保安院に要望書を提出し下北半島の活断層の存在と再処理や大間原発の安全性等について質問と要望を行った。特に五月に「直下活断

層説」を提起した渡辺満久教授の説を、耐震バックチェックのために重要なものと受け止めヒアリングを行うべきだと申し入れた。国会では残念ながら核施設の耐震問題についてはまだ発言が少ないが、六月には岩手県選出の主浜議員が参議院において「再処理施設の下に活断層がある」という説が出されたがどうか」と質問した。答弁に立った保安院平岡英治審議官は、「学説が提起されたことは知っているが検討中である」と答えている。今後国会議員に働き掛けて、国会の場で国策である「核燃サイクル」の問題点をあきらかにし、政策転換させてゆかなければなりません。

下北半島は地震性隆起を繰り返している 渡辺満久氏

二番目の報告者は変動地形学の渡辺満久先生でした。分かりやすいスライドを使ったプレゼンテーションでした。

十二・五万年前の海岸段丘面(s面)
海食によって海岸につ



メートルも高い。これは本来水平だった海岸段丘面が大間側で隆起したからである。その隆起が大きな地震を伴ったものであることは大間

くられる平たい地形は「海岸段丘面」と呼ばれる。数千年単位で海面を調べると上昇したり下降したりしている。今よりやや暖かかった十二・五万年前の海面はゆつくりと上昇し安定、それから次第に下降に移った。だから比較的広い「海岸段丘面」を世界中に残した。その時代には同じ海拔ゼロの「波打ち海岸」であったこの「一段丘面（S面と呼ばれる）」の現在の海拔高度を調べる事によって、その海岸の隆起などの変動経過を知ることが出来る。その隆起は、定常的にゆつくりと地面が盛りあがるのではなく激しい地震を伴いながら変動するのが普通である。

下北半島が隆起した証拠

例えば大間崎周辺の段丘面は十数^キ南にある佐井の海岸付近より約四五



崎の近くの弁天島燈台の付近の地形を見れば一目りよう然である。ここ

数千年の間（縄文時代）に二回もの大きな地震による急激な隆起の痕が段差として残っている。

隠された活断層

六カ所の地形はやはり十二・五万年前に形成された海岸段丘面であり本来水平でなければならぬ。しかし現地を見ると東の海岸に向かって大き

活断層は

深いところにある

石橋克彦氏

三番目に報告してくださったのは地震学の石橋克彦先生でした。やはりスライドなどを使い次のように報告されました。

地震とは、

断層面のズレ破壊

地震は、地層の断層面のズレ破壊から起こる。マグニチュードは地震の大きさを表す数字である

くたわんでいる。これは六カ所の地層の深くに「逆断層」が存在して堆積層にたわみをもたらしているからである。それは東の海面下の「大陸棚外縁断層と連続している」と考えられ、M8級の大地震の直撃もあり得る。

世界には「活断層の真上にあつた町は壊滅したが、直ぐ近くの町にはほとんど被害がなかったという例」がある。万一時甚大な被害を及ぼす原子力施設の立地は、活断層の上は絶対に避けるべきだ、と語りました。

が、大まかには震源断層面の大きさを反映している。M8クラスの巨大地震では、長さ百〜一五〇^キ、幅五〇^キ、ズレの量約五^キ、破壊時間約一分などという大きさである。問題なのは「地層の浅いところで地震が繰り返されても活断層が見つからない場合」がある。実際には地殻深くの活断層と連動している場合である。海底音波探査では、海底地層の浅い部分までしか有効に探査出来ない。変動地形学の成果など最近の地震学の総合的な成果による判断が必要であ

第二部質問と討論

宝の持ち腐れ

○「活断層安全審査の手引き」が六月につくられた。しかし、「累積的地殻変動を重視する」という基準は、官僚中心の安全審査の体制では生かされていない。「指針」とは関係のないところと判断され、私達の意見はなかなか通らない。（渡辺）

罰則の必要はない？

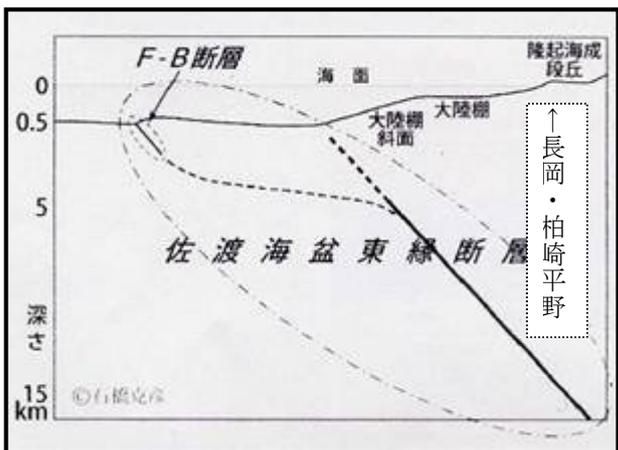
○日本でも「揺れ」の地震のみではなく「ズレ」の地震被害について理解を深めるべきである。カリフォルニア州やニュージーランドには活断層を解明しその土地の利用制限の法がある。原発や工場、病院、学校などは厳しく規制される。個人も二階建てはダメとか。個人には罰則は必要ないかも。被害を受けたい人はいないのだから。（渡辺）

新潟県地震・地質・地盤に関する小委員会

○中越沖地震のあと、新潟県では標記の小委員会が設置され、私も委員となった。地震学の最新の判断を实らせたい。（石橋）

奥の細道の「象潟」

○江戸時代、一晩で一〜二^キも隆起して海の名勝から陸の松林になった秋田県南の象潟（さかさかた）は典型的な地殻隆起地震による。（石橋）



佐渡海盆東縁断層は

活断層である

新潟県の柏崎刈羽原発

は二〇〇七年七月の中越沖地震によって現在停止中である。

あの地震で観音崎付近は二五^キ隆起した。本州側が隆起地形をつくり佐渡海盆に向かう大陸棚は斜面を形成している。この下に大きな活断層、

「佐渡海盆東縁断層」があると言

う説に東京電力は、それより沖合

にある「F-B断層」のみに注目し、音波探査では包括的な佐渡海盆東縁断層が存在し繋がっている証拠はないと

未熟な地震学の下で立地した原子力施設

現代地震学の成立は一九六〇年代後半。原子力政策は一九五〇年代に始まり七〇年代に原発建設ラッシュとなった。当時は地震の静穏期でもあった。しかし現在は大地震が頻繁に起こる活動期に入っており、当時の未熟な地震学の下で立地し、耐震強度も低く、おまけに老朽化した施設の危険性が増している。このような非合理を見直し、速やかに改めるべき時だと考える。